
DIEID-FREE-

五十嵐 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DIEID-FREE -

【NZコード】

NZ8593NZ

【作者名】

五十嵐 ゆう

【あらすじ】

<http://ncode.syosetu.com/s4141a/>

時系列的には、一年後 翔15歳

序章【平和】（前書き）

翔「久しぶりだな、諸君。残念だが私は寝るぞ」

優「お前の口調はなんなんだ？」

本日出番なし

勇者「カーッペツ」

序章【平和】

翔子（あー、だるい寒い眠い）

優「寝りやあいじやねえかよ、テレパシーで話すべり怠いんな
「あひ

翔子（あ、リモコン取つて）

優「自分で取れや、魔法使つてさ」

翔子（お？やんのかテメエ？お？）

優「だーもー！分かつたよ！ほれ

翔子（Thanks）

翔子「……」

優「あ？何で俺にリモコン向ける？」

翔子（いや、リモコンで操作出来ないかな？って。やんつと思つたら出来るんだけど）

優「なんかして欲しいなら言えやー！何想ひじこ事考えてんだー？」

翔子（ストーブ付けて、頃合を見て消しこと。おやすみ）

優「……」

優 じゅう
優 じゅう（じゅうじゅう）

優（魔法が安定してきたから、全てを魔法に頼つて……）

優（そうしたら生き方もつになつて……）

優 じゅう

翔子（そんな回想ついから、さつわと付ける）

優（殺すぞ）

翔子（出来るんなら）

優（犯すぞ）

翔子（酔るぞ）

翔子「…………」

優「…………」

翔子「そうだ、異世界トロップしよう」

優「勝手にしんなよ」

翔子「最近弟が冷たい…………」

優「充分良心的だわ」

翔子「じゃあ適当に持つていくか」

翔子「拳銃と、警棒と、……あ、なんか飯屋のオヤジに貰った石だ」

翔子「これも持つて！」

翔子「で、どう行きやい」と思つ?」

優「あ？好きなアニメの世界にでも行けば？」

翔子「…………優君が冷たいよ…………グスン」

優「つづけ」

翔子「無視するわ。うーん、好きなアニメ…………禁書とか？」

優「禁書厨が」

翔子「禁書厨だ」

優「じゃあやつをと逝けよ

翔子「よしーじゃあ行つてへーの」

序章【平和】（後書き）

続く

ルイズルイズルイズうううわああああ！【第1章】（前書き）

翔「エオルー・ヌー・フィル・ヤルンサクサ オス・ヌー・ウ
リュ・ル・ラド

ベオーズス・ユル・スヴュエル・カノ・オシェラ ジェラ・イサ・
ウンジュー・ハガル・ベオクン・イル」

翔「エクスプロージョン！」

優「やめろ！」

ルイズルイズルイズ「ううううわああああー【第1章】

「あんた誰よ」

翔（……確かに俺は、禁書の世界へトロップしようとして……）

「見ひよーゼロの『ルイズ』が平民召喚したぜー。」

翔（……ルイズ?）は、ゼロの使い魔の世界か?）

「「うむむこーちよつと間違えただけよー」

翔（ゼロ使あんまり知らないんだよなー、原作知識皆無であります
隊長）

「もう一回召喚させてくださいー。」

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

翔「あの、」

「アンタはちよつと黙つてでー。」

翔「…………Fuck」ボソ

「一度呼び出した『使い魔』は変更することは出来ない。
何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。」

「でも！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

翔（…………使い魔…………ねえ…………）

「確かに前例はないかもしけないが、それでも君が呼び出した使い魔なんだ。

それとも君はせっかくの魔法成功をふいにするつもりかな？」

「…………」

「では、儀式を続けなさい」

翔（…………つい、眠い…………天使化してまでやるんじゃなかつた異世界トリップ…………つか、今気付いたけど、俺男モードになつてゐな。翼も収納されてるし）

「あんた、感謝しなさこひみね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」「…………なに言つてんだろ俺）

翔（明らか日本語じやないが、俺の自動翻訳魔法で、といつかテレパス（弱）に常識は通用しねえ！

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペントAGON。この者に祝福を与え、我的使い魔となせ

翔「うおつー回避

回避は出来なかつた、キスされた

翔「 、痛ッ、あ、あああ！」

「使い魔のルーンが刻まれてるだけよ、すぐに終わる」

翔（ 、痛みを遮断……痛みで集中出来ねえ……。アドレナリンの分泌をカット……）

する前に気絶、といつか失神？

翔「知らない天井だ……。じゃねえよ、まずは状況の把握を

ルイズ「ようやく目が覚めたのね」

翔「あ、思い出した思い出したー、あははー……」

ルイズ「胃が痛くなる程悩んだけど、諦めて貴方を使い魔にする事にしたわ」

翔「ぶ・ち・こ・ろ・し 確定ね」

ルイズ「はあ？何言って

とりあえず、テレズマで首を撃ち抜く

翔「あ、おはようございます」

ルイズ「…………あれ？ いつのまに寝て……？」

翔「疲れてたんじやないッスか？ 先輩いきなり倒れたんスよ？」

ルイズ「…………んー？ アンタがいきなり「ぶちころす」とか言って……」

翔「何言つてんスか？ 寝ぼけてるんですか？ 顔を洗つてきた方がいいですよ」

ルイズ「…………」

翔「そうそう、俺の左手の甲にルーン文字的な物が刻まれてたんスけど、先輩これ何か分かります？」

ルイズ「それは使い魔のルーン…………」

翔「つまり俺は先輩の使い魔になつた、という訳ですね。殺すぞ」

ルイズ「え？ 今殺すとか」

翔「……？ どうしたんスか先輩？」

ルイズ「え？ 今殺すつて言わなかつた？」

翔「言つてませんよ、先輩の聞き間違いッスよ、俺先輩の事マジリ
スペクトしてますし。

証拠にルイズコピペ暗唱しましょうか？

ルイズ「ルイズコピペ……？」

ああああああ…ああ…あつあつー！ああああああああー！ルイズ
ルイズルイズうううわあああああーーー！

ああケンカケンカ!! ケンカケンカ!! ズリハリズリハリズリ
一ハー!! いい匂いだなあ……くんくん

カケンカしたいお！ケンカケンカ！あああ！！
間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ

小説12巻のルイズたんかわいかつたよう！！あああああ…あああ…あつあああああ！！ふあああああんんつ！！

アニメ2期放送されて良かつたねルイズたん！あああああああ！かわいい！ルイズたん！かわいい！あつああああ！

！－あ… 小説もアニメもよく考えたら…

「この一ちきしょー！やめてやるー！現実なんかやめてえー？見てる？表紙絵のルイズちゃんが僕見てる？

表紙絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！ルイズちゃんが僕を見てるぞ！挿絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！！

中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

「届け！」

ルイズ「ちよつちよつと！何語でんのよ！」

翔「ドヤ? ねえねえ今どんな気持ち? ねえ今どんな気持ち?」

ルイズ「ご飯抜きにするわよ！」

翔「…………、手品で懐から出したのは、百均で売つての拡声器」

本当は魔法で作つたんだけどね

ルイズ「……？」

翔「「これで」、ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズうううううわあああああああ！」

ルイスー や、やめなさい！！

翔「そろそろ朝食の時間ではないですか？適当に置んで置いた予備の制服にお着替え下さい」

ルイズ「適当つて……アンタ……」

翔

ルイズ一着せて

翔「……………？　ああ、そういうれば貴族は、下僕が居る時は自分で服を着ないんだっけ？」

ルイズ「そうよ、だから早く」

翔「めんどくせ」 チツ「めんどくせツ」

そういうつも、悪戦苦闘しつつ、服を着せる

ルイズ「貴族に対してそんな態度で、ただで済むと思つてゐるの？」

翔「チツ……うつせーな」

そういうと、魔力と殺気を出す。

ルイズ「 ッ！」

翔「……………」、行きませよ、プロジェクト・ジンサウマ」

殺氣を消す

ちなみに本氣をだせば殺氣で、一般人ぐらになら殺せん

翔「ほう、成程、ここは貴族専用で、俺は甘んじて此処に居をせて貰えて、

「この床の小さいパンが俺の朝食、と？」

ルイズ「そ、そつよ

翔「……………せめて水をくれません？パン・オ・コートで飲み物無しは正直キツイ気がする」

ルイズ「え、あ、はい」

翔「ありがと」

翔「もあもあもあもあ……噛みにくくつ

ルイズ「本当だつたら使い魔は食事中、外で待機させるんだからね」

翔「そつちから勝手に呼び出しておいて、何を仰っているのでしょうか、この姫は」

ルイズ「アンタ……さつきから貴族に向かって……」

翔「本当にいい身分ですこと」
殺氣発動

ルイズ「 ッ！」

翔「……つまんね……」
殺氣解除

ルイズルイズルイズうううわああああ！【第1章】（後書き）

続
く

人が貰、お前に関心持つと思つてんじゃねえぞ 【第1章】（前書き）

翔「君たち貴族は、魔法を使うんだろう？」

だつたら、『天使』と呼ばれた俺は……なんだろう……天罰？』

優「敵意を向けた相手を氣絶させるアレみたいだな」

翔「お前も、立派な禁書厨だな」

作者は、原作を読んでません。アニメと二次創作のみが頼りです
つーか原作を買う金がないというか

人が皆、お前に関心持つと思つてんじゃねえぞ 【第一章】

翔「「おーーなんだ」」のトカゲ的な何か！？恐竜？」

恐竜にしては小さいし、何より恐竜は火を吹かない

「この子は私の使い魔フレーム。誰かさんとは違つて一発で成功よ」

翔「へえ、凄いですね。撫でていでですか？」

「いいわよ？」

翔「よーし。……警戒されてる……」

威嚇された、撫でようとしたら避けられた

翔「……なんですか？なんなんですか？なんなんだよちくしょ！」

ルイズ「何下らない事してるのよ」

翔「俺から茶番劇を奪う気ですか」」主人様、それは俺に死ねといふんですか」」主人！」

「ふふ、面白い子ね」

翔「あ、はい、どうもです」

ルイズ「下らない事しないで、行くわよ」

翔「了解」

翔「結局、あの人と自己紹介すらしてなかつたが、人間としてどうなの？」

ルイズ「いいのよ、別に！」

翔「お前の事は俺が守るけどさ、権力からはお前が俺を守れよ」

ルイズ「……？ 何言つてんの？」

翔「あの人貴族っぽかっただけどさ、俺が挨拶すらしなかつた事にキレたらお前が責任取れよ、と」

ルイズ「ああ、大丈夫よ、多分」

翔「そうか」

ルイズ「……いよいよ敬語までなくなつたわね……」

翔「敬語じゃなくなるのは親愛の証だよ。

如何に俺が平民といえば、俺は使い魔なんだしさ、親しくても何ら損はしないぜ？」

ルイズ「……」

翔「信頼度〇だと、命令も聞かなくなるぜ？」

ルイズ「……そうね」

も「反論すり出来るくなつたな

翔「で」（神のみ風）

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。
このシユヴルーズ、こいつやって春の新学期に様々な使い魔たちを見
るのが、
とても楽しみなのですよ」

翔「床つめてー」

勿論、小声だ

シユヴルーズ「おやおや、随分変わった使い魔を召喚したものですね。ミス・ヴァリエール」

翔（皮肉ですか、皮肉なんですか、皮肉なのか三段活用。どう？）

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を

連れてくるなよ。」

ルイズ「違うわーちゃんと召喚したわよー。」

翔「面倒臭いけど、主人の為に反論してあげます。」

ミス・シユヴルーズ「その台詞は皮肉にしか聞こえませんー。」

ルイズ「そっちー？」

翔「あと、次いでに、えーと……ミスター・誰かー三文字以上で謝罪してくださいー！」

「誰がお前みたいな、平民の言つことなど……」

翔「謝罪しろ」

殺氣解放

ほとんどの人が恐怖を感じ、身の安全を図れりとし始める。机などの下に潜る人が現れるレベル

「すいませんでしたーー。」

翔「謝罪と感謝はタダなんですし、やる時はやつた方がいいんですね」

殺氣解除、笑顔で話す

翔「ミス・シユヴルーズ。杖を下ろして、三文字以上で謝罪してください」

シユヴルーズ「え、ええ。」めんなさいね、ミス・ヴァリエール

ルイズ「あ、いえ」

その後、ゴチャゴチャと説明が続く
殆ど知識と感覚で知つていていた物なので上の空で聞いていた
四大系統は 火 水 土 風
四大元素と大体同じかなつて感じで

そして五つ目に虚無、今では失われたらしい
虚無、エーテルや空と似たような物だろうと

そして、土は一番重要ですよ、と。これがないと、
金属を作り出したり、加工したりできないよ、と
まあ、確かに、教室内は魔力で包まれていたな、って

シユヴルーズ「それじゃあ、誰かに『鍊金』をやってもらいましょう
それじゃあ、ミス・ヴァリエール」

ルイズ「私ですか？」

翔「頑張れ、あの程度、君なら出来るよ」
小声で言う

なんか知らんが此奴の魔力は結構凄い、翔の1/200000位はある

「先生、やめておいた方がいいと思いますけど……」

シユヴルーズ「どうしてですか？」

「危険です」

シユヴルーズ「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですか？」

シユヴルーズ「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。

さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやつて御覧なさい。

失敗を恐れていっては、何も出来ませんよ？」

「ルイズ。やめて」

ルイズ「やります！」

翔（空氣不穏やな、とりあえず、防護術式でも貼つとくか）

シユヴルーズ「さあ、ミス・ヴァリエール。

鍊金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

ドカーン

翔「 ツ！？」

防護術式を貫通した

翔は、四大天使レベルの魔力量を誇つていてる。
禁書厨なら、この凄まじさは分かるだろう

量ではなく、質

何か分からぬ、防護を貫通する、何か

質は重要だ

例えば、金すら溶かす王水という液体は、それでもタンタル、イリジウムといった、酸に非常に強い性質を持つ金属を溶かす事は出来ない

翔「面白え……ちくしょ、最高にいいね。愉快に素敵に決まつち
まつたぞ……」

ルイズ「ちょっと失敗みた

ルイズは翔が目に止まつた瞬間、動けなくなつた
なんか、凄い怖い顔してたからだ

翔「で」

なんか罰として掃除しようと

ルイズ「あんた、私のこと馬鹿にしてるでしょ。貴族なのに魔法が
使えないなんて、つて」

翔「別に俺はそんな事欠片も思つてないぞ?」

ルイズ「嘘! 今まで皆そうだった。失敗するたびにゼロだって馬
鹿にして」

翔「人が皆、お前に関心持つと思つてんじゃねえぞ」

ルイズ「……つ」

翔「いいじゃないか、別に数百数千失敗しても、それがメンタルポ
イントになるんだから」

ルイズ「…………」

翔「魔法以外には、お前に価値が無い？」

ルイズ「そうよ…………」

翔「…………じゃあ…………」

翔はポケットの中を探る

そこから出でてきたのは、黒光りする拳銃

翔「拳銃くらい分かるよな？」

そういうと、その辺の壁を擊つ

ルイズ「！？」

翔「お前には、価値がないってんなら、まずは死ね」

ルイズの眉間に銃口を向ける

数秒経つ

翔「嘘」

ルイズ「……え？」

翔「殺すつもりなら、最初に召喚された時にやつてる
「

人が皆、お前に関心持つと思つてんじゃねえぞ 【第1章】（後書き）

ギーシュとの決闘までやりたかったが、それは、また今度

ふふふん ふふふん ふつふつふ～【（前書き）

翔「ルイズのあの爆発を使えば、大抵の奴は黙らせられると思つ」

優「そうだね～」

ふふふん ふふふん ふつふつふ～【

「君が軽率に香水の小瓶を拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」
「す、すいません！」

翔「今北産業……なんの騒ぎですかこれ？」
適当に、その辺の給仕に聞く

- 要約すると
- ・香水を拾う
- ・二股バレる
- ・ハツ当たり

翔「ふうん……見苦しつ…ギザ見苦しつ…」

「君、今なんと？」

翔「見苦しいと言いました、お分かりいただろうつか」

「ふん……。ああ、君は……」

翔「ミス・ヴァリエールに召喚といつ名の拉致監禁を喰らいました。
西田翔といつ」

翔「『ゼロ』のルイズが呼び出した平民か。やはり主人と同じく中身も『ゼロ』なのかな？」

翔「…………ふつ、いいボケが思いつかないな……。ま、いつか」

「…………礼儀を知らないみたいだね」

翔「いや、礼儀を向けて」ない奴に対しても礼節を重んじる必要が何処にある?」

「…………」の後に及んで減らず口を叩くね……」

翔「つか、話戻すけどさ。

「股したお前が悪いんじゃね? (笑)

そもそも、そんな事しなければ、こんな小瓶でこんな事に発展せずに済んだものだらう

Q・E・D・はい論破。異論は認めない

「…………言わせておけば…………! 決闘だ!」

翔「決闘?あの、あれか、殺し合いつつ意味の古い決闘か? そりじやなきや興味はない」

「ふんつ、今のウチに吠えてるといい。ヴェストリの広場で待つ

翔「ヴェストリだな?」了解した

翔「で」

ルイズ「あんた何してんのよ! 見てたわよ!」

「なんで勝手に決闘なんか決めちゃつてんのよ、あんたは!」

翔「大丈夫だよ、俺にはこれがあるからだ」

翔は、ホルスターから拳銃を取り出し、クルクルと回そうとした所で

翔「危なつ！やべえ！

何ナチュラルに安全装置セーフティがついてない拳銃回そうとしてんだ俺

！？」

翔が使つてる銃はSIG SAUER P226。

最高級の品質だが

マニコアルセーフティが付いていないのと、価格が高いという理由で米軍のトライアルでM92に負けた

これを使つてる理由は、妙に手に馴染んだというだけ

ルイズ「でも、それでも平民は貴族に勝てない物なの！」

翔「まあそうだな、絶対に勝てない物つてあるんだよな。

まあ、でもあんな見下すしか脳がない奴に、俺を殺せると
は思えないしな」

ルイズ「でも

翔「少しだけ、黙ついてくれないか」

魔術、というか魔法？で黙らせる

詳しく述べと、喋る気が起きなくなる

「諸君！ 決闘だ！」

翔「お、おひ。何だその掛け声？ダサ いや、似合ひてほこるけどね」

モテない三枚目臭がブンブンするぜ

「逃げずに来たことは褒めても褒めいやらつじやないか

翔「褒めても体液と武器しか出ないぜ？ 本当身一つで来ちゃったもんだから

「…………。では始めようか

「ボクはメイジだ。だから魔法で戦う。よもや、文句はあるまいね？」

翔「敗北は死を意味するこの場では、持てる手段は全て使つべきだ。文句などないよ、代わりに驚くけど

ギーシュ「よくぞ戻った。ボクの『青銅』。青銅のギーシュ。

したがって青銅の『ゴーレム』、『ワルキューレ』が君のお相手をしよう」

翔「…………、スズと銅の化合物か……

まあいいや、この場合、俺も名乗った方がいいか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翔は銃を抜き、両手で構える、狙いは頭部
明らかに殺す気だ

パンと一発撃つてみる

青銅のゴーレムに遮られる
銃弾が当たったゴーレムは、
3サント程の穴が空き、そこを中心に行きくビビが入り、ゴーレム
は倒れる

「チツ……面倒臭い盾だな」

「！？……まさかワルキューを碎くとは……だが……」

6体のゴーレムが出現する

「へーいへーいへーい」

4発撃つ、4体当たる。ワルキュー行動不能

「的が大きいと狙いやすいな！ まあ、狙いは足だからそんなに関
係ないんだけどね」

これでも、翔は拳銃一つで銃を持った8人のおっさんを殺せたんだ
から

銃の扱いはお手の物

「あつと2体」 ふふんふうん

翔はあるで、子供が玩具で遊んでる様な声で唄いながら引き金を引く

パンパンと2つの銃声が鳴る

2体居たゴーレムも右足を撃ち抜かれ、バランスが取れずに転倒、行動不能に

「アハハッ！ オイオイこれで終わりとかねえよな？
こつちはまだ牽制しかしてないんですけどお？」

翔は拳銃から弾倉を抜いて、弾数を確かめる

（…………残り8発…………薬室のを入れれば9発か…………まあ充分だな）

弾倉を入れ、敵を見る

6体のゴーレムを再び召喚した様で
1体のゴーレムが殴りかかってくる

魔術の才能（？）以外は殆ど運動不足気味の中学生でしかない翔に
青銅の鎧の一撃を耐え切れる訳がなく

拳銃を落とし、地面に倒れ伏せる

（　油断した　ツ！？）

とつぞに前受身を取つて立ち上がる

「…………アヒヤハハハハハハハハ！！ 畜生、分かったよ
もう油断しねえ。もう余裕をとらねえ。もう隙を作らねえ。
ありがとうよ、これはもう一生俺に油断させねえいい薬だ
そんな訳で死ねええええええええ！」

肉体強化で地面を思いつきり蹴り付ける

フィジカルチャント

地面に軽くヒビが入り、衝撃で土が舞い散る

「な、なんだー!?」

「あははハははははハハー！ 演出、クロローラー、華々しく散らせて
やるから感謝しそうー！ー！」

そのまま一対の翼を展開
本気で消す気だ

「あ、亜人ー!?」

「とつあえずうーびづの調理しようかなー」

無邪気に、楽しそうに、好きな音楽でも聞いているかのよう、翔
は語る

「た、助けてくれーー！」

「お、おう？ ……んじや、まあ5割引で許してやんよー。」

「5割……？ か、金ー?」

「いやいや、やうじやなくてえ」

翔は、一つ間を置いて

「お前の皮膚の5割を剥いでやる、それでも生きてたら、許してや
るつってんだよ」

アハハハハ！ という笑い声と共に、翼の羽を一本ちぎる

「痛ッ！……『イル・アース・デル』」
翔は、鍊金の呪文を唱える。すると、もふもふの羽が鉄製の刃に変化する

「一ノ、降参だ！」

その刃はペーパーナイフよりも見劣る程の物であつたが、ギーシュ
は翔に威圧され
羽の翼にすら恐怖を覚えた

「.....つまんな！ つまんな！ つまんなえな

翔は、ギーシュに向かつて羽の刃を投げる

足にサクッと刺さる
別に大した傷にはならない

ただ、貴族のおぼっちゃまに、刃物が突き刺さる痛みに耐えられる
わけもなく

「さあて、帰るか。テレポ！」

翔「ただいま帰還しましたぜ、ご主人様？」

ルイズ「アンタ亞人だったの！？」

翔「鯵？ あじん？ なんぞそれ？」

ルイズ「誤魔化さないで！！」

翔「誤魔化してない」

ルイズ「…………」

翔「杖を向けんとい、悲しくなるから」

翔は軽く手に光を灯らせる、ちなみに只の光だ

ルイズ「 ッ！」

翔「さつさと帰りましょよ、ご主人様」

ふふふん ふふふん ふつふつふ

【(後書き)

続
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8593z/>

DIEID-FREE-

2012年1月8日20時52分発行